



人間文化研究機構 ネットワーク型基幹研究プロジェクト
 地域研究推進事業 南アジア地域研究



ISSN 2432-437X

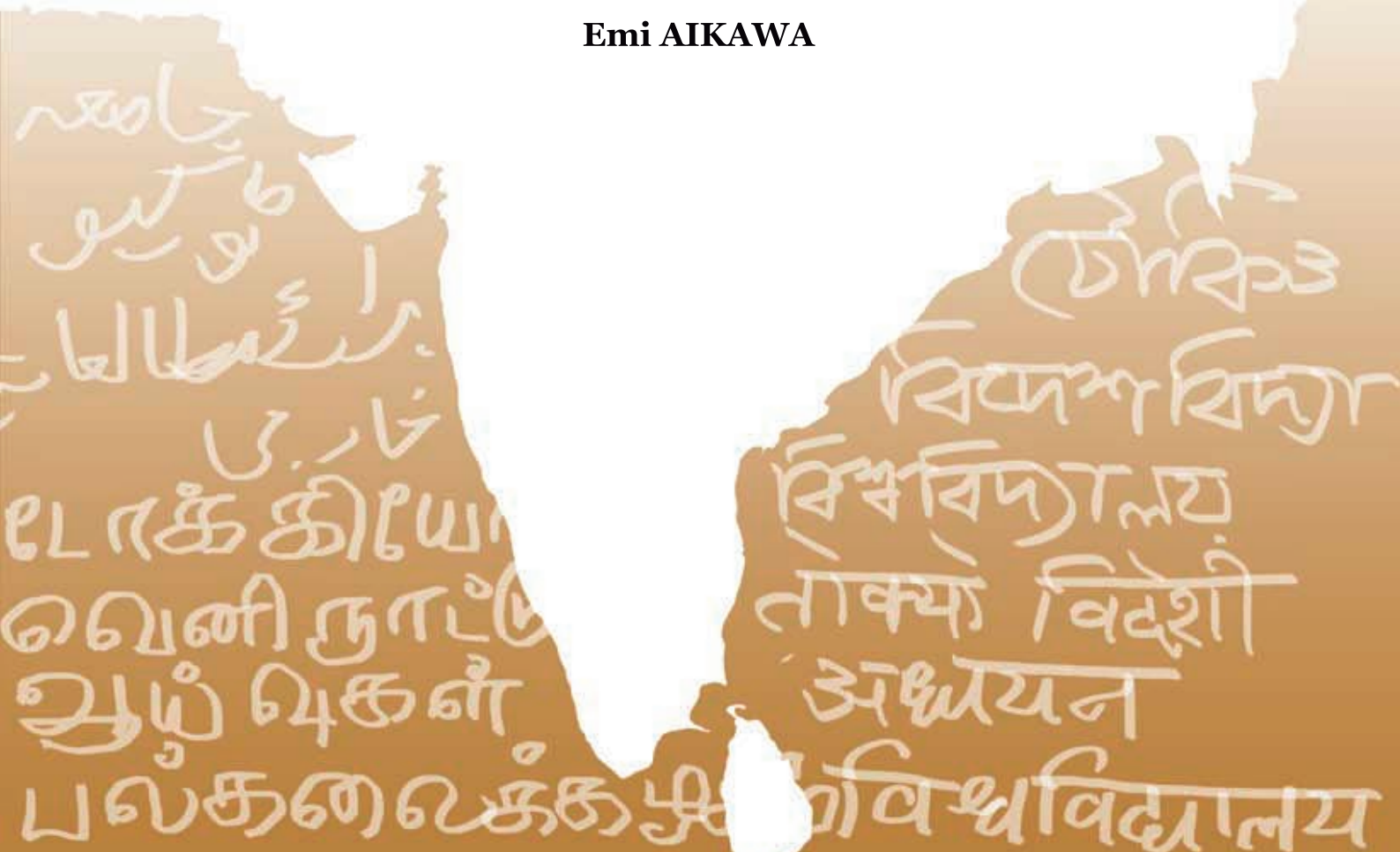
FINDAS

The Center for South Asian Studies,
 Tokyo University of Foreign Studies
 東京外国語大学 南アジア研究センター

東京外国語大学南アジア研究リサーチペーパー 5

現代インドで生きるヒンドゥー教女性とその氏族女神の関係性
 — ラーニー・サティー女神信仰を事例として —
 相川 愛美

**The Relationship between Hindu Woman and Its Kula Devī (Family Deity)
 in Contemporary India: Focusing on Rāṇī Satī Worship**
 Emi AIKAWA



東京外国語大学拠点 南アジア研究センター

Center for South Asian Studies, Tokyo University of Foreign Studies (FINDAS)

研究テーマ「南アジアにおける文学・社会運動・ジェンダー」
Literature, Social Movements, and Gender Issues in South Asia

本拠点は、現代南アジアの構造変動に関する理解を、重層化・多元化・輻輳化する社会運動の歴史・政治・社会学的分析と文学分析、およびジェンダー視角を軸として深めることを目的とする。さらに、対象研究領域に関して、すでに東京外国語大学が所蔵する文献・史資料群を充実させることを系統的、意識的に追及し、国内における文献拠点となることをめざす。

本拠点の第1期（2010～2014年度）の研究活動を通じて、経済自由化・グローバル化にともなう現代インドにおける構造変動が、個人、家族、コミュニティ・レベルの人々の意識、ジェンダー関係に劇的な変容をもたらしたこと、アイデンティティの複合性と可変性がさらに加速化していること、ならびに、インドを特徴づけている活性化された民主政治が、それまで社会的周縁に位置づけられてきた諸集団の積極的な異議申し立てなしには理解できないという事実が明らかになった。第2期（2015～2019年度）では、社会運動の諸相をとくに、人的紐帯の変化、および、それらを支える情動や感性の側面に焦点をあてること、対象地域をさらに、南アジア地域に拡大するとともに、中国・東南アジア・イスラーム地域などの他地域との比較研究を意識的に組織化し、理論化を主導することに重点的に取り組む。

東京外国語大学は、ウルドゥー語・ヒンディー語・ベンガル語を中心に南アジアの諸言語の教育、および南アジア地域研究に関して明治期以来の長い歴史を有し、世界的に活躍する高度職業人ならびに日本における南アジア研究の中核を担う研究者を輩出してきた実績がある。また、国内有数の南アジア諸語文献・南アジア関連の文献・史料の所蔵を誇る。さらには、海外の南アジア研究者との学術交流にも長い伝統がある。こうした特長を最大限に生かしつつ、本拠点はさらに国内外の南アジア研究者のネットワークのハブとして共同研究を組織するとともに、若手研究者の育成を重点的に行い、南アジア地域研究のレベルを明示的に高めることをめざす。

研究ユニット1「輻輳する社会運動における実践と理論」

研究ユニット2「社会変動と文学」

東京外国語大学南アジア研究リサーチペーパー 5

現代インドで生きるヒンドゥー教女性とその氏族女神の関係性

— ラーニー・サティール女神信仰を事例として —

相 川 愛 美

現代インドで生きるヒンドゥー教女性とその氏族女神の関係性

— ラーニー・サティー女神信仰を事例として —*

相川 愛美**

**The Relationship between Hindu Woman and Its *Kula Devī* (Family Deity)
in Contemporary India : Focusing on Rāṇī Satī Worship***

Emi AIKAWA**

This study examines how the idea of *satī* is understood in contemporary India through the practice of *satī* worship which entails visits to *satī* temples, enshrining *satī* goddesses, informal congregations of devotees and *pūjā* ceremonies. (a Hindū ritual). These temples mostly commemorate women who have “committed” *satī* by entering the funeral pyre of their husbands and over time they have become deified as goddesses. This study will focus on the meaning of worship of “Rāṇī Satī” who is the most famous and prominent *satī* goddess among devotees.

I would like to show and analyze *satī* worshippers who spend their entire life centered around on Rāṇī Satī worship and how they embrace the idea, by interviewing women devotees of Rāṇī Satī worship who live in Kolkata. Through my interviews with the devotees, I have shown women’s activity in Rāṇī Satī worship. How they spend their entire life with Rāṇī Satī. How they feel toward Rāṇī Satī, how they do *pūjā*, *kīrtana*, and the social significance of this ritual on the lives of the worshippers. How this becomes a cultural aspect of their identity and sociality is discussed.

In Rāṇī Satī worship, it can be said that married women devotees of Rāṇī Satī try to work to create their space while understanding their position as a wife. Thus, within patriarchal structures that perpetuate a subordinate role for women, women are able to form their own roles within homes and domesticity, and in their modes of worship. In this context,

* 本稿は2016年1月10日に開催された「2015年度FINDAS第三回若手研究者セミナー、サティー女神が生み出すくつながり> : ラージャスターン州ラーニー・サティー寺院をめぐる祈りと運営のかたち」において発表させていただいた内容に加筆したものである。尚、発表時には先生方、諸先輩方から多くのご意見、ご指摘を頂戴した。この場をお借りして御礼申し上げたい。

** Ph.D. Course, Department of History, Faculty of Social Sciences, University of Delhi.

one may even speak of their “agency” in so far as, they focus on their wishes, roles and feel empowered by their special relationship with Rāṇī Satī.

はじめに

「あの 1987 年のデーオラーラー (Deorālā) 村で起こったサティイー (*satī*: 寡婦殉死) について、テレビや新聞で知ったけど、あんまりよくわかっていなかったわ。」と、いかにも自分とは無縁であるかのように話をしたのはラーニー・サティイー (Rāṇī Satī) 女神の敬虔な女性信者 H アグルワールである。ラーニー・サティイー女神とは、縁起譚によると 13 世紀に寡婦殉死した女性ナーラーヤニー・デーヴィー (Nārāyaṇī Devī) が女神化し、主に彼女の出身であるアグルワール (Agrvāla) カーストのバンサル (Bāmsala) 氏族ジャーラーン (Jālāna) の家系の氏族女神 (*kula devī*) とみなされている。1912 年に、カルカッタ (現コルカタ) 在住のアグルワール・カーストのバンサル氏族ジャーラーンの家系が中心となってサティイー寺院の運営委員会が発足された。そして 1957 年に、この運営委員会はトラストとして正式に登録され、縁起譚でナーラーヤニー・デーヴィーがサティイーになった場所、ラージャスターン州ジュンジュヌー県 (Jhunjhunū) に荘厳なラーニー・サティイー寺院を建てた。

H アグルワールは結婚後、義理の姉の誘いでラーニー・サティイー女神のキールタン (*kīrtana*: 音頭一同形式による賛歌詠唱) に参加したのをきっかけにラーニー・サティイー女神を信仰するようになった。H アグルワールは、アグルワール・カーストのゴーヤル (Goyala) 氏族の出身で、結婚後にバンサル氏族となった。バンサル氏族の女神であるという縁がきっかけで出会ったラーニー・サティイー女神は、現在、彼女にとって氏族女神という存在を超えてかけがえのない存在となっている。

1987 年ラージャスターン州シーカル (Sikara) 県デーオラーラー村において、18 歳の女性がわずかな新婚生活の後、病死した夫の遺体とともに茶毘に付されたという出来事が起こった。この出来事がきっかけとなり 1988 年にサティイー犯罪 (防止) 法が施行され、この法律によってサティイー (寡婦殉死) に対する強要、誘惑及びそれ自体の行為などはもとより、新たにサティイーの賛美の違法性が加えられた。そして、この新たな法律によって、サティイー (寡婦殉死) をした女性が女神として祀られているサティイー寺院は、ラージャスターン州政府によってその違法性が問われたのである。特にその違法の対象とされたのが、最も寺院規模が大きく参拝者も多いラージャスターン州ジュンジュヌー県に所在するラーニー・サティイー寺院であった。寺院運営危機を迎えたラーニー・サティイー寺院の運営委員会は、カルカッタ高裁に対して、本尊であるラーニー・サティイーは信者たちの氏族の女神で、ドゥルガー女神 (Durgā) の化身であると主張し、このサティイー崇拜はサティイー (寡婦殉死) を推奨するものではなく、むしろ寡婦殉死に対して反対の立場をとった。さらに“サティイー”とは貞節な妻 (*pativrata* パティヴラター) に与えられる称号であるという解釈を主張することで、

サティール賛美に相当しないと提訴した。それ以後、ラージャスターン州政府と寺院による裁判闘争が始まり、現在においてもその判決は下されていない。

このように、1988年以降ラーニー・サティール寺院の運営は危機的状況に陥ったにも関わらず、ラーニー・サティール女神信者のHアグルワールは、この事態をあまり気に留めていないようであった。筆者は彼女へ聞きとりを通して、彼女の関心は寺院運営危機云々、「組織、集団」というよりも、彼女自身とラーニー・サティール女神間における関係性、「個人の信仰」であるということを感じた。彼女にとって、ラーニー・サティールは氏族女神ということだけではなく、個人的な現世利益に伝えてくれる慈悲深い女神であり、「心の拠り所」ともいえる大きな存在である。本稿では、ラーニー・サティール女神を信仰する一人の女性Hアグルワールの日常生活と宗教活動に着目して、現代インドに生きるヒンドゥー教女性とその氏族女神の関係性を読み解こうとする。

1. 現代インドにおけるサティール崇拜と寺院状況

ーラージャスターン州シェーカーワーティール地域を対象にしてー

一般にサティールとは、夫が死んだ際に妻が夫の遺体とともに生きたまま茶毘に付されること（寡婦殉死）を意味する。サティールの観念はダルマシャーストラ (*dharmasāstra*) 文献にも言及され、その解釈は時代の変遷とともに異なるものの、おおよそ、サティール（寡婦殉死）をする女性は貞節な妻であるという解釈がされてきた。そして、現在インドでは、サティール（寡婦殉死）をした女性を女神として祀るサティール寺院が各地に存在する。各サティール寺院の本尊は寡婦殉死した女性で、その女神はその女神と同じカーストや氏族集団によって祀られ、その氏族集団の守護神としてみなされている。これらの寺院は私的寺院が多く、特にインド、ラージャスターン州シェーカーワーティール (*Śekhāwāṭī*) 地域に点在している。シェーカーワーティール地域とは、ジュンジュヌー県、チュールー県 (*Chūrū*)、シーカル県でまとめられ、筆者の2013年の現地調査によると、シェーカーワーティール地域では、計65のサティール寺院が確認することができた (図1参照)¹。さらに、それらのサティール寺院がどのようなカーストや集団によって運営されているのか、もしくはその参拝者の所属を分類してみると、アグルワール・カーストによる寺院が圧倒的であることがわかる (図2参照)。アグルワールとは、一般に王アグラセーナ (*Agrasena*) を創始者とした、商業に従事するカーストである²。その発祥地はデリーから北西190km、ハリヤーナー州ファターハー

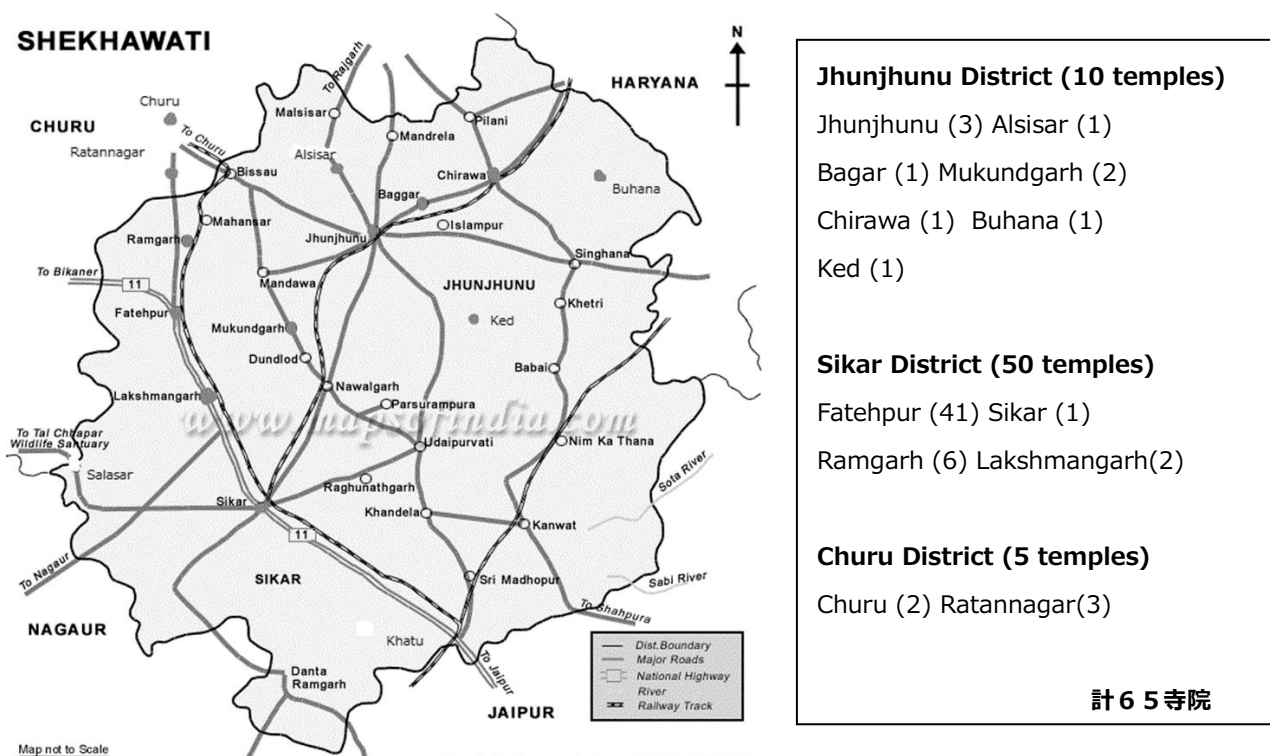
¹ この調査では、すべてのサティール寺院のデータを収集することを最終目的としており、現在も調査中である。

² アグルワールの族譜については、ヒンディー文学者バーラテンドゥ・ハリシュチャンドラ (*Bhāratendu Hariścandra*) (1850–1885) が “*Śrī Mahālakṣmī vrata kī kathā*” をもとに書き上げた、『アグルワールの起源 (*Agravāloṇ kī Utpatti*) (1871年) を初期のものとして、その起源譚が書かれる。

[Babb 2004 :198-202]

バード (Fathehabad) のアグローハー (Agrohā) とされる³。アグルワール・カーストは 18 (17.5) 氏族 (*gotra* ゴートラ: 伝説的始祖に連なる仮想血統) に分かれており、各氏族からさらに家系 (リネージ) が支派する (図 3 参照)。シェーカーワーティー地域における、アグルワール・カーストによるサティー寺院の内実をさらに細かく確認してみると、8 氏族 26 の家系によって寺院が運営されていることがわかった (図 4 参照)。

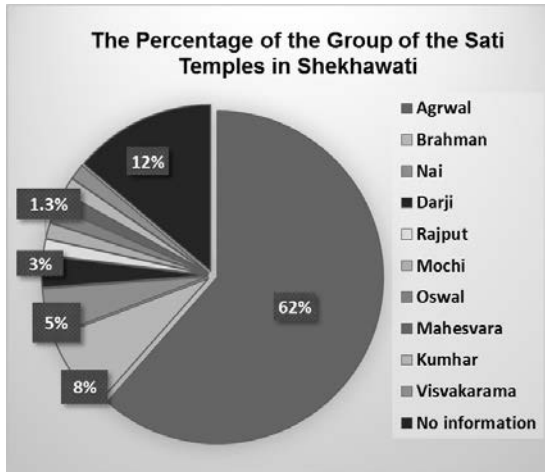
図 1. シェーカーワーティー地域のサティー寺院分布⁴



³ 古都アグローハーは 1888 年に発掘され、それ以降アグローハー・ヴィカース・トラスト (Agrohā Vikāsa Trusta) によって発掘調査が実施されている。その後、アグルワールの発祥地として、王アグラセーナや、族譜において王の守護神となったラクシュミーなどを安置しているアグローハー・ダーム (Agrohā Dhāma) が建設され、現在に至る。[Babb 2004 : 186-187]

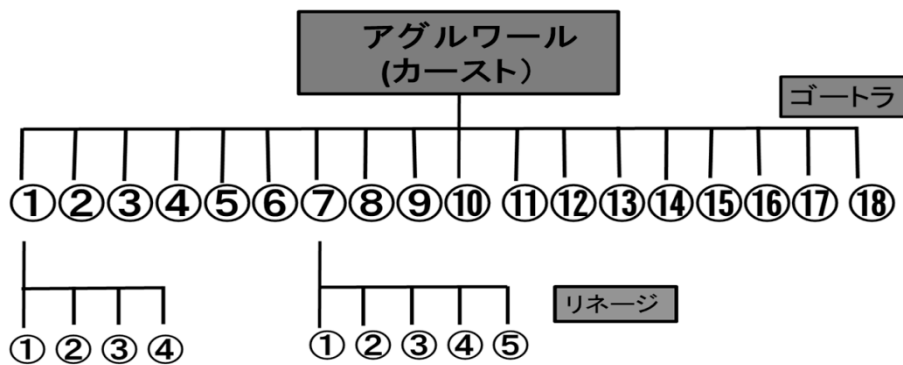
⁴ 筆者による 2013 年の実地調査をもとに作成。上図の地名は現在用いられている慣用表記に従った。

図 2. シェーカーワーティー地域における
サティ寺院の庇護者（パトロン）の分類の割合⁵



サティ寺院の庇護者（パトロン）の分類	数
Agrwal (Agrvāla) 商人カースト	40
Brahman (Brāhmaṇa) 司祭階級	5
Nai (Nāi) 理髪業に従事するカースト	3
Darji (Darji) 仕立業を生業とするカースト	2
Rajput (Rājputa) ラージャスターンに政権を打ち立てた尚武の種族	1
Mochi (Moci) 皮革製関係を生業とするカースト	1
Oswal (Osvāla) 商人カースト	1
Mahesvara (Maheśvari) 商人カースト	1
Kumhar (Kumhāra) 陶器製造を生業とするカースト	1
Visvakarama (Viśvakarmā) 大工	1
No information	9
Total	65

図 3. アグルワールの 18 (17.5) 氏族⁶

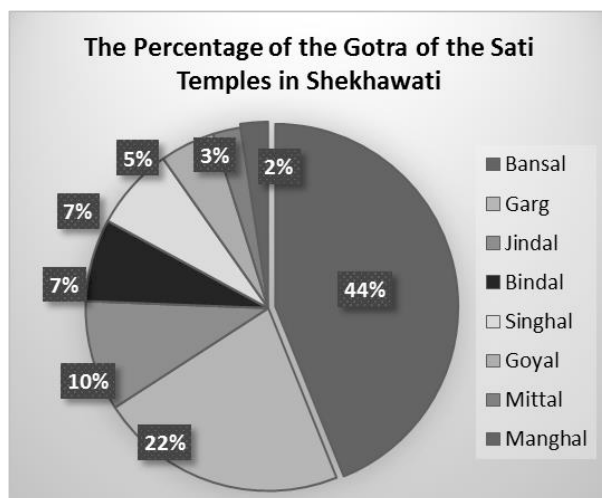


1	Garg (Garga)	2	Goyal (Goyala)	3	Goyanor (Goyana)	4	Bansal (Baṃsala)	5	Singhal (Siṃghala)	6	Kansal (Kaṃsala)
7	Mangal (Maṃgala)	8	Jindal (Jiṃdala)	9	Tingal (Tiṃgala)	10	Airan (Airāṇa)	11	Dharan (Dhāraṇa)	12	Madhukul (Madhukula)
13	Bindal (Bindala)	14	Mittal (Mittala)	15	Tayal (Tāyala)	16	Bhandal (Bhandala)	17	Nagal (Nāgala)	18	Kuchhal (Kucchala)

⁵ 筆者による 2013 年の実地調査をもとに作成。慣用表記に従った。

⁶ [Agrvāla 2012] を参考に筆者作成。

図 4. シェーカーワーティー地域におけるサティー寺院のゴートラ別信者の割合⁷



ゴートラ	リネージ
Bansal	18
Garg	9
Jindal	4
Bindal	3
Singhal	3
Goyal	2
Mittal	1
Manghal	1

シェーカーワーティー地域におけるサティー寺院は、氏族や家系によって、寺院数も偏りが見られる。つまり、有力な氏族、家系によって建設されている寺院の数が多く、そうでない氏族や家系の寺院の数は少ない。また、財政不足や管理者の不在によって、過去に存在したサティー寺院はすでに撤去されている場合もある。一方、有力な氏族や家系による寺院はメンテナンスが行き届いている。たとえば、それらのサティー寺院には、同族が遠方から参拝した際に宿泊することができるダラムシャーラー (*dharamśālā*) などが完備されている。このように、サティー寺院の運営とその状態は、氏族や家系の集団の規模や経済力に関係していることがわかる。

そして、これらのサティー寺院の運営に携わるメンバーは、主にコルカタやデリー、ムンバイなどに在住しているアグルワールの人々である。19世紀頃をはじめとして、ラージャスターンからインド各地に移住した商人をマールワリー (*Mārwārī*) と呼び、彼らは様々な生業を持つ商業カーストであり、そこにアグルワール・カーストも含まれる。20世紀に入って鉄道網が完備されると、マールワリーのベンガル地方カルクッタへの本格的な移住が始まり、多くのアグルワール・カーストの人々も移住した。彼らは、独自の手法によって移住先で社会的地位を確立したが、その一方で、移住者に対する地元住民のイメージは否定的であった [小松 2013 : 142]。彼らは、このような社会的イメージを最善させるべく、慈善活動、教育機関などの社会事業に従事し始める。さらに、彼らは故郷であるラージャスターンの発展、教育水準向上などを目的にトラストを次々と結成する。そして、アグルワール・カーストは、同地方における氏族女神であるサティー寺院を建設した。土地とのつながりを持たないアグルワール・カーストのマールワリーにとって、故郷への寺院建設や投資行為自体がその場所とのつながりを意味し、故郷ラージャスターン州に氏族の女神を祀るこれらのサティー寺院は、彼らにとって故郷とのつながりを表象し、氏族の守護神を共有す

⁷ 筆者による 2013 年の実地調査をもとに作成。慣用表記に従った。

る者同士で郷愁を共有する機会を与えている[中谷 2013]。このような寺院における運営活動や宗教的活動を通して、同郷、同族というカテゴリーで繋がったコミュニティが徐々に結成され、彼らの「氏族」のアイデンティティは再確認がなされているといえる。

このような寺院建設は、故郷から離れ、実業家として成功した人々によって主導され、氏族女神の寺院に多額の寄付をして寺院を建設し、「伝統的」な祭祀コミュニティとしての位置を確保するばかりでなく、時代を超えた「伝統」的な寺院空間のうちに自己を位置付けることによって、特定のカーストのアイデンティティを確認している [杉本 2006:248-249]。また、このような繋がりにはビジネスチャンスに繋がることもあり、サティー寺院は情報交換の場所となり、サティー寺院は信仰心という私的領域における自己と神との宗教的な場所から、寺院への寄進という公共の福祉への経済的な貢献に転換し、社会的威信という象徴資本を獲得しているといえる [杉本 2006:249]。

2. ラーニー・サティー女神とその崇拜

ラーニー・サティー女神については、1975年にラマーカーント・シャルマー (Ramākānta Śarmā) によって韻文体で書かれた『シュリー・ナーラーヤニーの行いの湖』(*Śrī Nārāyaṇī Carita Mānasa*) の縁起譚と、彼の弟子であるハルゴーヴィンド・ムラールカー

(Haragovinda Murārakā) が、この韻文体で書かれた行伝をより多くの人々に知ってもらうために読みやすい散文体で書いて 2001 年に出版された『不死の幸福な女性 不死の勇敢な女性 サティーの第一人者 シュリー・ラーニー・サティー・ダーヴィー・ジーの不滅の生涯物語』(*amara suhāgana, amara vīrāṅganā, satī śīromaṇī, śrī rāṇī satī dādījī kī amara jīvana kathā*) から辿ることができる⁸。縁起譚によると、ラーニー・サティー女神は、13 世紀に寡婦殉死した女性ナーラーヤニー・デーヴィーとされ、彼女はアグルワール・カーストのバンサル氏族ジャーランの家系に属し、現在では同族の守護神とみなされている。縁起譚では、夫を敵に殺されたナーラーヤニー・デーヴィーがドゥルガー女神の化身であるチャンディー (*Caṇḍī*) の姿になって敵を一撃で倒す描写があることから、ラーニー・サティー女神はドゥルガー女神と同一視されている。これは、6 世紀頃に編纂された『デーヴィーマーハートミヤ』(*Devīmāhātmya*) の第 11 章ナーラーヤニー讃歌において、ナーラーヤニーとドゥルガー女神は同一視されていることに影響されているとも考えられるが、挿入の由来は不明である。また、信者たちは、ラーニー・サティー女神はドゥルガー女神の表象から、宇宙最高の女性原理であるシャクティの顕現である三叉戟 (*trīsūla* トリシュール) を象徴的に崇拜している。

ラーニー・サティー女神の縁起譚を簡単に以下に紹介する。

13 世紀、北インドにおいて、商業カーストのアグルワールに属する夫婦間に娘が生まれた。彼女は、ナーラーヤニー・デーヴィーと名付けられた。幼少期からサットの力 (*sat*:善

⁸ この縁起譚については、[相川 2015]で考察を行っている。

行を積んで得られる力)を持っていた彼女は、その力を様々な場面で人々に示していた。彼女が13歳になったとき、両親が自分の結婚について心配しはじめたのを見かねて、前世で結婚が約束されていた彼女の結婚相手、ヒサル(Hisāra)国の宰相の息子タンダン・ダース(Tandhana Dāsa)をサットの方で見つけだし、二人の結婚の日程が取り決められた。タンダン・ダースは、ナーラーヤニー・デーヴィーの父親から持参金としてもらった黒色の雌馬に毎日乗っていた。ある日、それに嫉妬していたヒサル国の太守の息子は、その黒色の雌馬を盗もうと馬小屋に侵入した。その時、太守の息子を不審者と勘違いしたタンダン・ダースは彼を殺してしまった。この事態を深刻にとらえたタンダン・ダースの一家は、ヒサル国の太守の復讐を恐れ、当時ヒサル国と敵対関係であったジュンジュヌー王国に保護を求めて逃げ込んだ。

ムクラワー(*muklāvā*: 新郎が新婦を同棲開始のために家につれてくる儀礼)の日、新婦ナーラーヤニー・デーヴィーを迎え入れるために、タンダン・ダースはジュンジュヌー王国を離れ彼女の生家に迎えに行った。そして、タンダン・ダースとナーラーヤニー・デーヴィーが婚家に向かっている途中、息子を殺されたヒサルの太守が現れて、太守はタンダン・ダースを殺した。夫を敵に眼前で殺されたナーラーヤニー・デーヴィーは、チャンディーの姿となり、すべての敵を瞬時に倒した。その後、彼女はサティーになる⁹意思を明らかにした。

彼女はサティーになるとき、従者のラーナー(Rāṇā)に自分たちの遺灰を集めてそれを布に包み、かの馬に乗せて馬の赴くままに歩かせ、馬が立ち止まる場所までついて行くように告げた。そして、彼女は自らのサットの方で火を発生させてサティーになった。その後、従者ラーナーはナーラーヤニー・デーヴィーの指示通りに馬の上に二人の遺灰を乗せて馬を赴くままに歩かせた。馬は進みに進んでジュンジュヌーのある尸陀林でとどまった。その後、彼女の家族によってその場所に基壇が作られた。

この縁起譚では、ナーラーヤニー・デーヴィーをオーソドックスなヒンドゥー教が説く理想的な女性で、かつ超越的な女神として描写していることが特徴的である。貞節な妻が積むことが可能なサットの力を彼女がさまざまな場面で見せるという描写は、彼女が「貞節な妻」であるということを強調させる。一方物語では、ナーラーヤニー・デーヴィーが自分で花婿を見つけたり、戦場で敵を打ち負かしたりするというような貞節な妻のイメージを壊しかねない「活動的」で、「男性的役割」をもった女性像が描写されている。しかしながら、彼女が示すそれらの自律性は、すべては自身のサティーになるという強い願望を果たすため、その最高の自己犠牲をすることで貞節な妻としての立場を保つことができているとい

⁹ 「サティー」は一般に寡婦殉死を意味するが、「サティーをする、行う」といった言及は、イギリス植民地時代にイギリス人たちによって用いられた。本来は「サティー」とはサンスクリット語の *satī* の女性形 *satī* で「良き女性」を意味し、「サティーになる」と言うのが通常である。ヒンドゥー教におけるサンスクリット文献においても「サティーになる」と描写されている。

える。

縁起譚では、妻は夫に貞節な女性（パティヴラター）であるべきで、サティールになることは、妻にとって最高の自己犠牲であり、理想であると教える。しかしながら、著者のハルゴーヴィンド・ムラールカーは、以下に示すように、小冊子の〈聖語〉¹⁰において、パティヴラターの究極の自己犠牲は、サティール（寡婦殉死）であるとは説かず、むしろ寡婦殉死に反対する立場をとって彼自身の持論を展開する。彼は、「サティール」とは真実の境地を意味し、この境地を得た女性が「サティール」であると考え、サティール（寡婦殉死）と結びつけることを否定した。それゆえ、サティール崇拜は、寡婦殉死を助長するものではなく、「自分の崇高な行為と振る舞い、つまりパティヴラターであることによって、サティールになることができる」と言及する。

ムラールカーはサティールについて以下のように説く¹¹。

「サティール」とは慣行ではなく、最も優れた真実の境地である。サティールを慣行という言葉と結びつけるな。すなわちサティールの慣行〔という〕言葉は誤りである。

「サティール」とは個人の名前ではなく女性が社会によって与えられた最高の称号なのである。

「真実」の境地を得た女性は自分の家系の名を高め、自ら望む死をとげ、夫とともに天界に永遠に住んで、それからこの死の世界に生まれることはない。このような彼女は、不滅の女〔人〕と言われる。

サティール崇拜は婦人に火の中に入ることに断じて助長するものではなく、火の中に入ることの意義を認めるのは無知である。

母なるナーラーヤニー・デーヴィーが火の中に入ったのは当時の社会の通念に従って、全世界の安寧のためにとっても優れた「真実」の境地にあったので行われた。今日の社会の通念を見ると、模倣してはいけない。

迷信と無知によって夫と一緒に火の中に入るような女性は、決して偉大で、幸福で、そして不死であるとは言われない。「サティール」は自分の崇高な行いと振る舞いによってサティールにならなければならない。単に火の中に入ることによってでは、決して「サティール」になることはできない。

さらに、パティヴラターとは以下のような存在であると言及する。

¹⁰ 小冊子の最後にある大事な教えのことば

¹¹ [Murārakā 2000 : 30-32]

夫に貞節な女性とは、毎日自分の夫の御足に触れ、そして夫に対して奉仕の念に満ち、真摯でなければならない。

夫に貞節な女性は自分の夫だけをグル（導師）として、そして導く人として受け入れるのである。彼女は他の男を自分のグルとはしない。

サティールである女性は夫に忠誠である努めを遵守することと同時に社会の発展に、創造的な貢献をすることにも誓いを立てている。

ムラールカーは貞節な妻は、夫に対して奉仕の念を抱いて常に夫に忠誠であることが重要であると述べる。さらに、すべての女性たちがパティヴラターになり「サティール」の称号を獲得するように薦める。それらは先祖供養、健康的な身体、夫への奉仕精神、菜食、夫を人生の指導者として考える、無私の心での年長者の世話などの貞節な妻の具体的な特徴を挙げる [Murārakā 2001]。

ラーニー・サティール女神は氏族女神であり、同族であれば男性、女性に関係なく礼拝されているが、著者ムラールカーによる言及は、明らかに“妻”を対象とした内容が多く含まれ、それらからは家父長的イデオロギーがみられる。また、小冊子が出版された時期は、1988年から始まったラーニー・サティール寺院とラージャスターン州政府のサティールの解釈をめぐる裁判闘争のさなかであったため、この小冊子の出版は、寡婦殉死の慣行への反対意見を強調することで、社会的批判からサティール女神崇拝を回避させることが目的であったとも考えられる。

3. ラーニー・サティール女神信仰 一女性信者の日常生活と宗教活動に着目して¹²—

生家と婚家の氏族女神との関係性

北インドにおいて、ラージプート（Rājputa）の女性が嫁ぐということは、夫の血族家系の一員となり、新婦は生家の伝統や習わしを捨てて、婚家の伝統や習わしに従わなければならないことを意味した。それは、自身の氏族の守護神の信仰も例外ではなく、ラージプート間では、守護神は、その家系の名誉と繁栄を導く神聖なる神で非常に重要視されているため、新婦が婚家の守護神を礼拝することは当然のこととして考えられた¹³。例えば、北インド中世の宗教史の中で有名な、クリシュナ（Kṛṣṇa）神への信愛を生涯貫き通したミーラーン・バーイー（Mīrām Bāī）が、婚家の守護神を礼拝することを拒んだことで様々な困難な目に

¹² ここでは、筆者が2012年6月から2015年11月にかけて数回に及んだコルカタの実地調査の結果をもとに考察を行った。調査場所としてコルカタを選定した理由は、サティール女神崇拝の中心はアグルワール・カーストのマールワリーであり、彼女らが主にコルカタ在住であるという事実に基づく。

¹³ ラージプートにおける氏族女神の研究は、リンゼイ・ハーランによって行われている。[Harlan 1992]

あわされるという伝承は有名である。

ラージプートの女性たちにとって婚家の氏族女神の礼拝は絶対であるが、彼女たちにとっては、婚前に礼拝していた生家の氏族女神も大事な存在である。そのため結婚後の彼女たちの氏族女神信仰における実践的礼拝行為において、女性たちは、1) 婚家の氏族女神を第一に礼拝し、次に生家の氏族女神を礼拝するというように優先順位を決める、2) 婚家と生家の氏族女神を汎ヒンドゥー教的なドゥルガー女神と同一視することで両女神の本質は同じであると解釈する、3) 彼女の心の中で彼女自身の守護神を選択するという方法で、氏族女神信仰において生じる緊張関係を緩和しているという研究成果が人類学者であるリンゼイ・ハーランによって指摘されている [Harlan 1992]。

アグルワールについて言及すると、彼らはカースト内婚、氏族外婚でお見合いが通常である。アグルワール・コミュニティ間にもそれぞれの氏族や家系が女神を守護神として持ち、彼女たちもラージプートと同様に、婚姻時に婚家の守護神を受け入れることが期待される。そこで、筆者は、アグルワールのラーニー・サティー女神の女性信者たちが、氏族女神信仰において生じる緊張関係をどのように解決するのか調べてみた。そうすると、女性信者たちの解決方法は大きく5分類することができた。

- 1) 婚家の守護神としてラーニー・サティー女神を受け入れ、信仰する。
- 2) 生家と婚家の守護神の両方を受け入れ信仰する。
- 3) 彼女自身が信仰の優先順位を決めて信仰する。
- 4) 生家の氏族の女神を結婚後も優先的に継続して信仰する。
- 5) 生家と婚家の守護神の両方をドゥルガー女神と同一視、もしくはシャクティの顕現と認識して、それぞれを同等とみなして信仰する。

以下、各分類の事例を紹介し、女性信者たちと生家、婚家のそれぞれの氏族女神についての関係性をまとめた。

1) 婚家の守護神としてラーニー・サティー女神を受け入れる。

アグルワールの A さんはゴヤル氏族の家系に生まれた。A さんは 1979 年にお見合い結婚をして、バンサル氏族となった。彼女は、結婚を機に婚家の氏族女神ラーニー・サティー女神を信仰するようになった。生家の氏族女神から婚家の氏族女神への切り替えに抵抗はなく、精神的緊張もなく婚家の氏族女神を受け入れた。彼女の主な宗教的活動は、毎朝の礼拝、キールタンへの参加、年に2回ラージャスターン州ジュンジュヌー県のラーニー・サティー寺院で開催される例大祭への参加である¹⁴。

2) 生家と婚家の守護神の両方を受け入れ信仰する。

アグルワールである B さんはガルガ氏族の家系に生まれ、氏族女神であるチャーオー・サティー (Cāvo Satī) 女神を信仰していた。1993 年にお見合い結婚をしてバンサル氏族

¹⁴ 2014 年 11 月 4 日筆者の聞きとり調査による。於コルカタ。

となり、結婚後は婚家の氏族女神であるラーニー・サティーも信仰するようになった。彼女の主な活動は毎朝の礼拝、寺院参拝、キールタンへの参加、例大祭への参加である。彼女は、ラーニー・サティー女神を礼拝しているが、心の中では婚家と生家の女神両方を信仰しており、婚家と生家の氏族女神を同一視している。彼女は、大事なことは心であり実践的な行為ではないと考えている¹⁵。

3) 彼女自身が信仰の優先順位を決めて信仰する。

アグルワールのゴーヤル氏族の家系に生まれた H さんの氏族女神はカールカー・マター (Kālkā Mātā) であった。彼女はお見合い結婚後、バンサル氏族となった。彼女は結婚前も結婚後も氏族女神についてほとんど意識していなかった。しかしながら、人からの紹介を経て、ラーニー・サティー女神の信仰に目覚める。現在は、氏族女神であるという存在を超えて、ラーニー・サティー女神を深く信仰している (詳しくは後述する)。

4) 生家の氏族の女神を結婚後も継続して優先的に信仰する。

アグルワールのバンサル氏族であった C さんは、幼少期から両親の影響でラーニー・サティー女神を信仰していた。その後、彼女はミッタル氏族の家系に嫁いだ¹⁶。この家系の氏族女神はドゥルガー女神であるが、現在も生家の氏族女神であるラーニー・サティー女神を信仰している。彼女は、毎朝ラーニー・サティー女神を礼拝し、キールタンへの参加もしている。彼女の信仰に対して、夫やその家族は反対せず、家庭内で特に問題はない¹⁷。

5) 生家と婚家の守護神の両方をドゥルガー女神と同一視、もしくはシャクティの顕現と認識して、それぞれを同等とみなして信仰する。

アグルワールである D さんはバンサル氏族の家系に生まれ、氏族女神はラーニー・サティー女神であった。1982 年にお見合い結婚をして、ガルガ氏族となった。この家系はケーリヤー・サティー (Keṛiyā Satī) が氏族女神である。彼女が幼少期のとき、両親はラーニー・サティー女神を礼拝していたが、彼女自身はあまりラーニー・サティー女神に関心がなかった。しかし、結婚後に氏族女神を意識するようになり、現在は両女神をシャクティの顕現であるとみなしてラーニー・サティー女神とケーリヤー・サティー女神を信仰している¹⁸。

上記から、アグルワール間の結婚時に生じる氏族女神と女性信者たちの関係の変化には、

¹⁵ 2014 年 11 月 4 日筆者の聞きとり調査による。於コルカタ。

¹⁶ 結婚年やお見合い結婚かどうかは不明。

¹⁷ 2014 年 11 月 4 日筆者の聞きとり調査による。於コルカタ。

¹⁸ 2014 年 11 月 4 日筆者の聞きとり調査による。於コルカタ。

信仰における緊張関係はなく氏族女神の選択に非常に柔軟性があることがわかる。ハーランによれば、ラージプートの女性たちは、婚家の氏族女神に対する礼拝が絶対であるという状況の中で、いかにして生家の氏族女神に礼拝を継続できるかが問題であり、その問題を解決するためにさまざまな解釈をすることで、彼女たちと氏族女神間に生じる緊張関係を緩和していた。アグルワールの女性たちもラージプートの女性たちと同じような解決方法で氏族女神信仰に生じる緊張関係を緩和している。しかしながら、氏族女神と彼女たちの関係性はラージプートの女性が置かれた状況に比べるとずっと自由で緩い環境における両女神に対する解釈であることがわかった。

また、ラーニー・サティー女神は、もともとバンサル氏族ジャーラーン家系の氏族女神であったが、近年ではバンサル氏族全体の女神もしくはアグルワール全体の女神であるなどと人々によって言われるようになり、現在ではラーニー・サティー女神を信仰する者であれば、誰でも信仰を歓迎される。そして、ラーニー・サティー女神が汎ヒンドゥー教的なドゥルガー女神や宇宙最高原理であるシャクティの顕現とみなされていることから、在コルカタのラーニー・サティー寺院には、寺院の近隣に住む地元住人も参拝していることが筆者の調査によって確認されている。このような現象は、寺院の運営活動やその宗教的活動を通して、同家系というカテゴリーで繋がったコミュニティが形成され、同氏族、同カースト、そして現代ではさらに信仰対象者を広げて、汎ヒンドゥー教女神的存在として拡大されてきているということを意味する。この現代インドにおけるラーニー・サティー女神の普遍化の傾向は、ラーニー・サティー女神信者の人々の氏族女神に対する解釈の柔軟性を助長している可能性がある」と筆者は考えるが、この点に関しては考察の余地がある。

4. H アグルワールの語りから

冒頭で紹介した H アグルワールは 1970 年生まれで、現在は西ベンガル州コルカタの U 地域に夫と娘と息子、義理の母、そして犬とともにマンションの一室で暮らしている。このマンションの立地は、駅から近い幹線道路沿いにそびえ立ち非常に人通りが多いが、敷地内に入ると、それらのにぎわいが気にならない程の静けさがある。マンションの入り口には、守衛が 24 時間体制で客人の出入りの管理をしており、いわゆる現代インドの中間層レベルが住むマンションといえる。彼女の部屋は 3BHK で、家族で住むには快適な広さである。また 2015 年には、同マンションの一室をさらに購入し、現在はその部屋を賃貸に出しているとのことである。

H アグルワールはコルカタで生まれ育った。彼女の故郷はラージャスターン州シーカル県で、彼女の祖父母がラージャスターンからコルカタに移住したマールワーリーである。彼女は、アグルワール・カーストのゴーヤル氏族の家系に生まれ、婚前の氏族女神はカールカー・マーターであった。彼女は単科大学を卒業後、お見合い結婚した。彼女の夫 M アグルワール氏はマールワーリーのバンサル氏族でラージャスターン州ジャイプール県が故郷で、

彼は主に繊維関係の仕入れ業を生業としている。H アグルワールは、バンサル氏族に嫁いだ後にラーニー・サティー女神が自分の氏族女神であるということを知ったが、夫との結婚を機にこの氏族女神の礼拝を始めたのではない。彼女は、ラーニー・サティー女神に次第に魅力を感じて信仰を始めたのである。

信仰のきっかけ

彼女は、25歳の時に長女を出産した。その後、漠然と長男出産の必要性を感じていたとき、近所に住んでいる兄嫁に誘われてラーニー・サティー女神のキールタンに参加した。そのときは、信仰心を持つに至らなかったが、彼女はキールタンに何度か参加し、その歌を聴いているうちに、もっとキールタンに参加したいと思うようになった。しかしながら、それに参加するとなると、4時間ほど家を空けてしまうこととなる。夫は、仕事から帰宅すると家に妻がいることが当然であると考えていたため、彼女がキールタンに参加することを反対していた。そのような時、彼女の夢にラーニー・サティーが現れて、女神は彼女に信仰を促した。しかしながら、彼女は自分の家庭状況からどのように信仰すればいいのかわからなかった。そうすると、ラーニー・サティーは再度夢に現れて、彼女に献灯するように告げた。生理中の彼女は献灯することができなかった。女神は次に、断食することを告げた。彼女はそれ以降、月に2度だけ夫には言わないで断食を始めると、彼女はすぐに長男を授かった¹⁹。

夢にラーニー・サティー女神が出現して信仰を促すという現象は、信者の間では珍しいことではない。信者と夢の中に出現した女神の双方間で、信仰と引き換えに恩恵を与えるという“交渉”が行われる。その際に、ラーニー・サティー女神は自身の存在を信者に確信を与えるために、女神の座 (*śakti pīṭha* シャクティ・ピート) を残す。その痕跡によって信者は、女神の存在を確信し信仰を始めるのである。

信者たちは、ラーニー・サティー女神は、いつでもそばで見守ってくれていると信じ、女神を「マー (Mā : お母さん)」もしくは、「ダーディー・ジー (Dādī Jī : おばあさん)」と親しみを込めて呼ぶ。それは、子供は皆、どんなことがあっても母親のもとに戻ってくるように、ラーニー・サティー女神は、信者に対して常に温かく見守り慈悲を与えてくれる存在であると考えているからである。信者がラーニー・サティー女神を「マー」と呼ぶ場合は、厳しくも正しい道を導いてくれる母親のような存在、「ダーディー・ジー」と呼ぶ場合は、すべてを包み込んでくれるような慈悲深い存在であると認めている。そして、信者はラーニー・サティー女神にお願いをするのではなく、話を聞いてもらうことで、女神は必ずその問題を解決するために導いてくれると考えている²⁰。このように考えると、信者にとってラーニー・サティー女神は恐れ多い女神ではなく、身近で非常に親近感のある女神であるとみなされていることがわかる。また、ラーニー・サティー女神崇拝において、信者たちの信仰体

¹⁹ 2013年10月7日筆者の聞きとり調査による。於H アグルワール宅。

²⁰ 2013年10月6日筆者の聞きとり調査による。於H アグルワール宅。

験は非常に重要である。なぜなら、信者たちは数々の信仰体験を経て、女神への信仰心を深めているからである。それは、物欲的な願い事、闘病、人間関係等と内容は様々である。

H アグルワールの信仰体験 (2001年)

彼女がラーニー・サティー女神に対して信仰心を深めることになったのは彼女の夫が心臓の病気を患ったときであった。

彼女の話によると、彼女の息子の出産後まもなく、夫が心臓の病気を患った。その病状は一向に快方に向かわず4ヶ月経っても、夫は歩くこともできず病状は悪化した。そして、どこの病院に行っても医者にも、手術以外に治る可能性はいと告げられ、夫は仕事を辞めてエレベーターのある家に引っ越しするように薦められた。それは彼女たちにとって金銭的に非常に厳しい選択であった。そんなある日、心臓手術の専門家がバンガロールからコルカタに来ていることを知った彼女は、その医師に連絡をとった。その医師は多忙スケジュールのため、夫を診てくれることはなかったが、後日バンガロールで診てくれることを約束してくれた。後日、彼女は幼い息子を抱え、夫をバンガロールに連れて行き医師に診てもらおうと、薬での治療が可能で手術をする必要はないと告げられた。その後、夫の治療費に多額の金額を払うことなく、彼の病状は快方に向かい、現在に至っても特に問題はないという²¹。

さらに彼女は、夫の病気の克服だけではなく、夫からのラーニー・サティー女神の信仰の理解を得ることができた。彼女のキールタンの参加を快く思っていなかった夫が、参加を許してくれるようになったのである。そのきっかけは、夫が入院していたときであった。入院していた夫は、病室でたまたま机にあった彼女のラーニー・サティーの縁起譚の小冊子を手にとり、この物語を読んだ。彼女が病室に入ってきたとき、夫は涙を流していた。夫は彼女に言った。「この少女はわずか13歳で自分の夫のために命をなげうったのか・・・」と²²。それ以後、夫もラーニー・サティー女神を信仰するようになり、彼女は自由に宗教活動ができるようになったという。

主な宗教活動

彼女の一日は、ラーニー・サティー女神への礼拝から始まる。彼女の自宅には、大きさはおよそ120×60×150で非常に立派な祭壇がリビングに安置されている。祭壇の中心には、ラーニー・サティー女神の本尊画が安置され、その周囲にも同様に女神の本尊画が並べられている。その他にもヒンドゥー教の神々の本尊画も少しながら並べられている。

H アグルワールは起床し朝食前に身支度を整え、ラーニー・サティー女神の毎朝の礼拝を行う。チャーリーサー (*cālīsā*) という40行からなるヒンディー語の韻文『シュリー・ナーラーヤニー・チャリット・マーナス』を読誦する。その後、ラーニー・サティーのアールティー (*ārati*: 献灯) を行い、次にクリシュナ神のアールティーを行う。最後にシヴァ神

²¹ 2013年10月7日筆者の聞きとり調査による。於H アグルワール宅。

²² 2013年10月7日筆者の聞きとり調査による。於H アグルワール宅。

をダルシャン (*darśana* : 拝観) するというのが一連の流れでおよそ 40 分である。また、夜はラーニー・サティアーのアールティのみを行う。要する時間は約 10 分程度である。

彼女は、ラーニー・サティアー寺院に参拝する。現在コルカタには 2 箇所ラーニー・サティアー寺院があり、彼女の自宅から近い方のサティアー寺院までは、オートリキシャーで 15 分ほどの距離なので、彼女は時々参拝している。また、例大祭のときは、ラージャスターン州ジュンジュヌー県所在のラーニー・サティアー寺院へ家族やキールタンのグループ仲間と巡礼している。

ラーニー・サティアー女神崇拝では、女性信者たちはヴラト (*vrata* : 願掛けのための節食) を実施する。通常は月の白分と黒分第 12 日目に行い、一日一食の食事と水は飲むことができる。H アグルワールの場合は、地元地域のラーニー・サティアー女神信者グループ内でのローテーション制によって、このヴラトを行っている。ローテーション制というのは、月に二回のヴラトをグループ担当制にして、個人の実質的回数を減らし、お互いの日常生活における負担を減らす方法である。また、このような方法はグループ内における相互作用によって、信者間のヴラトに対する志を高める効果があると考えられている。また女性信者は、このヴラトのほか、年に 1 度だけ 24 時間行うヴラトや、ディワーリー期間におけるヴラトを行っている²³。

さらに、ラーニー・サティアー女神崇拝ではキールタンが積極的に行われている。アグルワールの女性は、字が読めない場合も多いので、このキールタンを通してラーニー・サティアー女神を知り、女神に魅了されることも少なくない。通常キールタンは、既婚女性が参加対象者で月に 1-2 回、信者の自宅で開催される。人数は最低 13 人のメンバーが必要であり²⁴、それ以下の人数では開催することはできない。また、一度のキールタンでは、ラーニー・サティアー女神の経本の読誦とアールティ、そして最後にプージャー (*pūjā* : ヒンドゥー教の神像礼拝の様式に則っておこなわれる礼拝儀式) を行うのが一連の流れ (およそ 3 時間) であり、これを途中で中断することは不可とされている。

現在コルカタでは、地域レベルで 3 つキールタンのグループが存在し、それぞれが個別で独立している。そのキールタングループのうちの 1 つのリーダーが H アグルワールで、このグループは 1999 年に結成された。現在のメンバーは 42-43 名ほどで、彼女はキールタンを主導的に唱える歌い手である。このグループは、年に一度開催される年次祭のために、毎月 200 ルピーを会費として徴収している。月に 2 回、月の白分と黒分第 12 日目 (ヴラトが行われる日) にメンバーの自宅でキールタンが行われている。毎度の開催場所もメンバー内におけるローテーションによって決められ、それは、2008 年から 2013 年の 5 年間一度も途切れることなく継続されている。

キールタンの遂行中、女性たちは、キールタンに合わせて手拍子をしたり立ち上がって踊

²³ ディワーリー期間にヴラトが行われるのは、ラーニー・サティアー女神がドゥルガー女神と同一視されているためである。

²⁴ ラーニー・サティアー女神は 13 の数字を好み、数々の場面で 13 という数字が使用される。

ったりと、心の高揚に任せて自分たちの感情を自由に表現する。そして、キールタンが終わると、メンバー同士でお互いの信仰体験や、家庭内の悩みなどをシェアすることで激励しあう。このような談笑の時間はメンバー同士の結束を強めているといえる。

さらに、女性たちはキールタンを通して自身の社会的立場を獲得する機会を得る。キールタンの開催にあたって、女性たちはそれぞれ役割を任される。例えば、キールタン開催場所の自宅提供者は、当日ホストとしてキールタンを遂行する役割が与えられる。その他にもキールタン参加者へのおもてなしを行う者、開催にあたっての連絡係など、女性たちは与えられた任務に責任を持つ。そして、女性信者自身がこのような社会的立場を、意外な機会でも獲得する。キールタンの最中で、しばしば、ある女性信者がトランス状態に陥る。彼女は目を閉じて上を向き、なにかを小声で呟く。そのとき、周囲の信者たちは彼女の足を触って敬意を示す。そうすると彼女は何かを呟きながら、その信者の背中をそっとたたくのである。それはまるで、彼女の身体にラーニー・サティー女神が憑依したかのように見えるが、これに関して、周囲の信者たちは、ラーニー・サティー女神は信者を見守る立場なので人間の身体に入ることはなく、つまり、それは憑依ではなく、彼女の感情の高揚が限界をこえてしまった結果であると考えられる。そして、キールタンの最中にトランス状態に陥るのは決まって同じ女性である。彼女がトランス状態に陥った時、周囲は決して憑依していると考えないが、そのように振る舞う。その理由は、彼女がトランス状態になることで、初めてキールタンに参加した人に強烈な印象を与えることができるからである。その出来事は、その様子を目の当たりにした人によって噂となってそれが人づてに伝わり、彼女を見に来ようと人が集まる。結果、そのグループの人数が増えることに繋がるということである。つまり、彼女は周囲によってトランス状態になることを期待されており、彼女自身もそれを理解しているのである。この状況において、彼女にしかできない役割が存在し彼女はそれを意識的にもしくは無意識的に遂行しているのである。

アグルワールの既婚女性は、専業主婦が多数で家にいることが常である。家族以外の人と繋がる機会が少ない彼女たちにとって、キールタンへの参加は、家族以外の社会的繋がり場の場となっていると言える。その中で、彼女たちは自分の役割は何かを考えて行動しているという主体性が見られる。それは、個体としての人は関係性のなかにあり、その関係性に対して働きかけながら、自己の立場を構築しようとする【常田 2011：8】働きなのではないだろうか。

H アグルワールとラーニー・サティー女神

－H アグルワールの3度目の信仰体験から（2011年）－

H アグルワールは、キールタンのグループへの参加のほか、寺院や信者の自宅などで開催されるキールタンを主導となって唱える役を務めている。例えば、オリシャー州に所在するラーニー・サティー寺院で2012年に開催された例大祭においてもキールタンを主導とな

って唱えた。彼女はこれらの活動で、報酬を受け取らない方針を採っている。なぜなら彼女は、自分の正しい行いによって、必ずラーニー・サティー女神から恩恵があると信じているからである。そのため、彼女は報酬をもらって人気を得ることや彼女自身の宣伝などは一切しないと決めている。もし、彼女が自然に有名になったのであれば、それこそがラーニー・サティーの恩恵であると考えている。そのような彼女は、3度目の信仰体験をする。

2011年のとき、彼女の喉にポリープが見つかった。彼女は歌を歌うと強い痛みを感じるようになり、歌手としては致命的であった。医者からは手術でしか治らないし、手術後は二度と歌を歌うことができないと告げられた。その当時、手術をすることをためらっていた彼女には、キールタンの歌い手としての依頼が多く来ていた。しかし、彼女は、のどが痛くて歌えないと世間に言えず、その依頼を断ることができなかつた。その結果、無理をして活動を続け、歌を歌えばいつも激痛が走った。いつしか彼女は、いっそ癌になれば、歌うこともあきらめることができ、世間にも公表できると考えるほどになった。彼女はラーニー・サティーに言った。「あなたのために歌っている私を、このような状況にするのであれば私をいっそ癌にしてください。私は歌手として死ぬことが本望です」と。その後、なぜか痛みは減少していき、現在は治療せずに歌手活動を行っている²⁵。

Hアグルワールは信仰体験を通して、ラーニー・サティー女神に対する信仰心を深め、現在は、女神との関係性は非常に密接で彼女の生活から宗教的活動を切り離すことは難しい。彼女は、ラーニー・サティーを崇拝する以前に様々な神々に礼拝をしてきたが、最終的に助けてくれたのはラーニー・サティー女神だと確信している。

2章で述べたように、『不死の幸福な女性 不死の勇敢な女性 サティーの第一人者 シュリー・ラーニー・サティー・ダーディー・ジーの不滅の生涯物語』では、著者ハルゴーヴィンド・ムラールカーによって、女性たちはパティヴラターであることが求められた。その具体的な意味合いは、妻は常に夫の社会的成功と長寿を一番に考え、夫に仕えるということであった。この、夫に貞節な女性（パティヴラター）であることの重要性を説く寺院縁起譚と著者ムラールカーの考えは、偏った女性観から生じた内容であり、その考えを助長させかねない。しかしながら、時代とともにラーニー・サティー崇拝に対する女性信者の意識も変化している。

Hアグルワールは、夫の稼ぎは家族が生きて行くために必要であり、妻は夫が健康を損なわないように、夫の健康管理をコントロールしなければならないと考える。離婚となった場合、夫は独り身となるため再婚が可能であるが、子どもを抱えた女性は、経済力を欠くこともあり、生活が困難となることを考えると、パティヴラターが必要であるという。

他の女性信者もHアグルワールの考えと同様で、男性は（ソト）でお金を稼ぎ、女性は家（ウチ）を守るというジェンダー的役割分担の考えを持ち、そこには経済的思惑が絡んでいた。

「私は、夫より先に死ぬことを望むわ。だって夫に先に死なれたら、収入がなくて私たち

²⁵ 2015年11月3日筆者の聞きとり調査による。於Hアグルワール宅。

生きて行けないわ。」と言った信者の発言²⁶からは、夫に対する自己犠牲的なパティヴラターではなく、夫の死後の金銭的問題の不安がみられ、非常に現実的な考え方であるとわかる。それは、ムラールカーが述べる自己犠牲的意味合いを持つパティヴラターの解釈とは相違していることを言わざるを得ない。

さらにいえば、そもそもパティヴラターという理想（規範）を意識していない信者も少なくない。ラーニー・サティー女神崇拜は、以前は既婚女性を対象とした信仰と考えられていたが、最近では未婚女性や寡婦の信者も増えてきた。その場合、彼女たちにとって、夫の健康管理などを考えて行動するなどのパティヴラターとしての実践的な行為はない。未婚女性の信者にとって大事なことは良きパートナーとの出会いであり、寡婦の信者にとっては家族の安寧である。ラーニー・サティー女神への信仰心が大事であるとする女性信者にとって、パティヴラターであることの重要性は薄れる。このような状況からもわかるように、現代におけるラーニー・サティー女神崇拜では、ムラールカーが提唱するパティヴラターの解釈と女性信者の受容の在り方に乖離があるといえる。

結びにかえて

本論では、コルカタにおけるラーニー・サティー女神崇拜の女性信者について着目し、現在インド都市社会における中産階層マールワリーの女性の信仰における具体像の一事例を示そうとした。

ポストコロニアルインドにおいて、アグルワールのラーニー・サティー女性信者たちは、男性はソト公共領域を担い、そして女性はウチ私的領域を担うという、インド植民地状況下で構築されてきたジェンダー的枠組みの中で生きてきた。彼女たちは20代前半にお見合い結婚して、専業主婦として家を守ってきた。それは、よき妻として、母、嫁として、夫、子ども、そして両親の世話をすることで、良き家庭を築いてきた。そこでは、夫に対する奉仕の精神を具現するパティヴラターが求められた。しかしながら、現代の女性信者たちは、一概にもそのような夫に仕えるという意味合いではなく、このジェンダー的枠組みを理解しながら、パティヴラターの役割を果たそうとする振る舞いが見られた。

さらに、ラーニー・サティー女神崇拜のキールタンを通じて、彼女たちは外の社会と繋がる手段を見つけた。氏族女神の宗教活動に参加するということは、氏族女神に対して信心深さをイメージさせる良き妻の姿である一方、既婚女性が外に出ることが快く思われていないのが現状の中で、彼女たちは、氏族女神のキールタンの参加によって、夫に比較的咎められずに外に出る機会を得たのである。そして、そのキールタンではメンバー同士がそれぞれの信仰体験をシェアすることで、ラーニー・サティー女神の信仰心を深めるということとはもとより、その活動内において、女性それぞれの立場をわきまえ、彼女自身の役割を考え行動しているということが明らかになった。

²⁶ 2012年8月16日筆者の聞きとり調査による。於コルカタ。

現代インドにおいて、マールワリー女性たちは変化しつつある。Hアグルワールによると、特に、今までマールワリー間では重要視されてこなかった女性に対する教育の必要性に関する意識が変わってきているという。

H アグルワールは、以前、夫のお店の拡大とともに生じた雇用問題から夫の仕事を手伝っていた（ソト社会への進出）。手伝い始めたとき、彼女は家族や親せきによって、外で仕事することをひどく非難されたが、稼ぐことはすべて子供の教育費用のためと考えてやめなかった。現在は外で働くことはなくなったが、家で内職をすることはあり、その場合はかならず家庭に影響がないように心がけているという。また、現在、彼女は歌手としての活動で、家を長時間あけることが多い。しかしながら、夫や子供たちは、彼女の活動に理解を示し、夫も子供も協力的であるという。さらにいえば、H アグルワールの娘が外で働くことに反対であった夫は、現在では娘のジュエリーデザイナーになるという夢を応援している。このような変化からもみられるように、マールワリーのコミュニティ間においても、グローバル化が進む社会におけるその影響を受けているといえるのではないだろうか。

参考文献

【ヒンディー語文献】

Agrvāla Svarājyamaṇi, 2012, *agrasena, agrohā, agrvāla*, Agrohā Vikāsa Trusta.

Haragovinda Murārakā, 2001, *amara suhāgana, amara vīrāṅganā, satī śīromaṇī, śrī rāṇī satī dādijī kī amara jīvana kathā*, śrī rāṇī satī dādī viśva śānti samsthāna, Nagpura.

Haragovinda Murārakā, 2001, *sata kī jyota*, śrī rāṇī satī dādī viśva śānti samsthāna, Nagpura.

Varmā Rāmagopāla, 1987, *Agrasaurabha*, Shree Agrvāla Samāja, Fatehpur, Shekhawati.

Vidyālamkāra Satyaketu, 2010, *Agrvāla jāti kā pracīna itihāsa*, Śrī sarasvatī sadana.

【英語文献】

Babb, Lawrence.A, 2004, *Alchemies of Violence: Myths of Identity and the Life of Trade in Western India*.

New Delhi :Sage Publication.

Hardgrove, Anne, 2004, *Community and Public Culture: The Marwaries in Calcutta*. New Delhi : Oxford University Press.

Harlan, Lindsey, 1992. *Religion and Rajput Women: The Ethic of Protection in Comtemporary Narratives*.

Berkeley: University of Carifornia Press.

Harlan, Lindsey, 1994, “Perfection and Devotion: Sati Tradition in Rajasthan” in *Sati The Blessing and*

the Curse: The Burning of Wives in India ed, John Stratton Hawley, Oxford University Press. pp.79-99.

Purnima Maghnani, 2010, “From Roop Kanwar to Ramkunwari, The Agitation against Widow Immolation”, *Degrees of Justice, New Perspective on Violence against Women in India* ed. Bishakha Datta, Zubaan. pp.169-197.

Sangari, Kumkum, and Vaid, Sudesh, 1991, “Institution, Beliefs, Ideologies : Women Immolation in Contemporary Rajasthan” in *Economis and Political Weekly*, vol.26:17, 27 April.WS 2-WS 18.

Timberg, Thomas, 1978, *The Marwaris: From Traders to Industrialists*. Delhi, Vikas Publishing House Pvt Ltd.

【日本語文献】

相川愛美、2015、「インドにおける「サティ」の観念の現代的再解釈ーラーニー・サティ寺院の縁起譚をめぐってー」、『宗教研究』384号、75-99頁。

栗屋利江、2003、「第五章 南アジア世界ジェンダーー歴史的視点から」、『現代南アジア⑤ 社会・文化・ジェンダー』、東京大学出版会、159-190頁。

小松久恵、2013、「『質実剛健』あるいは『享楽豪華』ー1920-30年代北インドにおけるマールワリー・イメージをめぐるー考察、『現代インド』第3号、131-151頁。

杉本聖子、2006、『〈女神の村〉の民族誌ー現代インドの文化資本としての家族・カースト・宗教』、風響社。

田中鉄也、2014、『インド人ビジネスマンとヒンドゥー寺院運営 マールワリーにとっての慈善・喜捨・実利』、風響社。

豊山亜希、2012、「『土着の伝統』と『複製の近代』ーハヴェーリー壁画にみる英領インド期の大衆美術とマールワリー・アイデンティティー」、『南アジア研究』第24号、56-80頁。

常田夕美子、2011、『ポストコロニアルを生きるー現代インド女性の行為主体性』、世界思想社。

中谷純江、1995、「インド・ラージャスターン州のラージプート女性の宗教的慣行ーヒンドゥー女性にとっての自己犠牲の意味」、『民族学研究』60/1、53-77頁。

中谷純江、2013、「『故郷』への投資ーラージャスターンの商業町と移動商人マールワリーー」、『現代インド』第3号、153-170頁。

藤井毅、2003、『歴史のなかのカーストー近代インドの〈自画像〉』、岩波書店。

三尾裕子、2009、「〈媽祖〉は誰にとっての神か？ーグローバル化・ナショナリズム・ローカル化」、鈴木正崇編『東アジアの民衆文化と祝祭空間』、慶応大学東アジア研究所、311-345頁。

東京外国語大学南アジア研究リサーチペーパーシリーズは、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト地域研究推進事業の出版物です。

人間文化研究機構 (NIHU) <http://www.nihu.jp/ja/research/suishin#network-chiiki>

NIHU プログラム 南アジア地域研究 (INDAS) <http://www.indas.asafas.kyoto-u.ac.jp/>

東京外国語大学拠点 南アジア研究センター (FINDAS) <http://www.tufs.ac.jp/ts/society/findas/>

東京外国語大学南アジア研究リサーチペーパー 5

現代インドで生きるヒンドゥー教女性とその氏族女神の関係性

— ラーニー・サティー女神信仰を事例として —

相川 愛美

2016年11月28日発行 非売品

発行 東京外国語大学 南アジア研究センター

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1

東京外国語大学 研究講義棟700号室 南アジア研究センター

TEL: 042-330-5222

<http://www.tufs.ac.jp/ts/society/findas/>

印刷 株式会社 美巧社 東京支社

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-35-4 グローリア駒込2F

TEL: 03-6912-2255

ISSN 2432-437X